奨励

じっと見る

奨励	山下 茂雄〔やました・しげお〕
奨励者紹介	日本キリスト教団醍醐教会牧師 社会福祉法人京都地の塩会つくし保育園園長

ペトロとヨハネが、午後三時の祈りの時に神殿に上って行った。すると、生まれながら足の不自由な男が運ばれて来た。神殿の境内に入る人に施しを乞うため、毎日「美しい門」という神殿の門のそばに置いてもらっていたのである。彼はペトロとヨハネが境内に入ろうとするのを見て、施しを乞うた。ペトロはヨハネと一緒に彼をじっと見て、「わたしたちを見なさい」と言った。

（使徒言行録　3章1-4節）

おはようございます。ご紹介いただいた醍醐教会の山下です。初めてこちらによせていただきました。私の世代は今出川しか知りませんので、駅からこちらまで歩いて来て、ここも同志社なのかと変な感慨を覚えています。

チャペル・アワーの春学期の統一テーマは「隣人を自分のように愛しなさい」という聖書の言葉だと聞いています。「隣人を自分のように愛する」。容易いことではありません。一般の人間には、よほどしっかりと意識しないと到底全うできうるものではないと思います。今日は、保育園での話も交えながら、そのとっかかりのような話をしたいと思います。

出会いが
出会いとなるために

さて、先ほどお読みいただいた聖書の箇所には、神殿の門の前でペトロが、足の不自由な男の人を癒す記事が記されています。ユダヤ人たちは、毎日決まった時間、つまり早朝と午後３時そして日没に祈る習慣がありました。ペトロたちもそのころは一般のユダヤ人と同じように、神殿で行われる定刻の礼拝に出席しておりました。彼らは、自分たちはキリスト者であるとの自覚をもちつつも、ユダヤ人としての神殿における礼拝の習慣はもち続けていたのです。

この日も午後３時、ペトロとヨハネは礼拝に出席するために神殿にやって来ました。すると、神殿の門の前に「生まれながら足の不自由な男が運ばれて来た」彼は「神殿の境内に入る人に施しを乞うため、毎日『美しい門』という神殿の門そばに置いてもらっていた」のです。

「置いてもらう」は、口語訳聖書では「置かれていた」と訳されています。「置かれていた」。まるで品物のようです。彼は、毎日品物のように神殿の門の前に置いていかれ、夕方になって、誰かにかかえられないかぎりそこから動くこともできず、参詣者に物乞いをして生きる他なかったのです。これがこの男の人の毎日の生活でした。

この日も彼は、いつものように神殿の門のそばにおりました。そこへ、ペトロたちが通りかかったのです。そして、彼らはこの男の人を「じっと見て『わたしたちを見なさい』と言った」と言うのです。

ここで「じっと見て」と訳されている字は、この物乞いをしていた人が、ペトロたちを「見て」というときの動詞とは違う字が使われています。「彼はペトロとヨハネが境内に入ろうとするのを見て」というときの「見て」は、普通の「見る」という字です。彼は、なにげなしにペトロたちを「見た」のです。それに対して、ペトロたちが、この男の人を「じっと見て」というときは、「注視する」「凝視する」「目をそらさないで見る」という字が使われています。岩波委員会訳の聖書は「じっと見詰めて」と訳しています。

今まで、この物乞いをしている人を、どれだけ「じっと見詰めた」人がいたでしょうか。多くの者は、この人を無視して、急ぎ足で神殿の中に消えて行ったのではないでしょうか。施しをする人も、ほとんど声をかけずに、彼の顔を見ることなく、ただ小銭を投げていくだけであったと思われます。そして、この人も、自分の前を通りかかる人たちが、彼に声をかけてくれることに対して、何の期待もしていなかったのではないかと思います。ところが、この日ペトロたちは、この人を「じっと見た」「じっと見詰めた」と言うのです。

この人は、毎日門のそばに品物を置くように置かれていました。一人の人格をもった人間に対する扱いとは程遠い生活でした。そして、そういう彼に注目する人は、残念ながら多くはなかったのです。しかし、このときペトロたちは彼を「じっと見詰めた」のです。ここには、この人を物として扱うのではなく、人格をもった一人の個人として接しようとしたペトロたちの姿が表されているように思います。

私たちは多くの人たちと出会っています。しかし、本当に出会っているのでしょうか。ただ、通りすぎているだけ。そういう出会いも多いのではないでしょうか。出会いが出会いとなるためには、「じっと見る」「じっと見詰める」そういう相手とかかわろうとする意思が大事なのではないかと思うのです。

笑顔が見える

保育園にはいろんな子どもたちがおります。そのなかには、重い障がいのある子どもたちもいます。２歳児クラスにＹ君という重い自閉症障がいの子どもがいました。彼には言葉がありません。こちらが話しかけても何ら応答をしてくれません。コミュニケーションの芽もない、そう思える子どもでした。

その子どもをある保育士がお世話をしていました。ある日、彼女は笑顔で今日はこんなことがありましたといろいろな報告をしてくれました。その報告を聞きながら、反省させられたのです。というのは、私には、全くコミュニケーションの芽もないと思える子どもが、その保育士には実に豊かな姿を見せているからです。

作家の灰谷健次郎さんが書いた『わたしの出会った子どもたち』（新潮社　１９８１年）という本を思い起こします。この本のなかに、麻理ちゃんという筋肉マヒでその表情を読み取ることができない子どもが登場します。

「ある日、ぼくは重大なことを知る。
かの女をプールへ連れていったときのことである。
危険がいっぱいの子だからと辞退する親を説得して、ぼくはかの女をおぶって連れていったのだった。
水着に着替えさせ、水に入れると、かの女は嬉々として手足を動かすのである。
意外だった。
そういう子だから、水は恐（こわ）がるものだとばかり思っていた。ぼくはいくぶん拍子抜けしたような気分にもなったけれど、かの女の喜びがぼくにも伝わって、ぼくは、胸が熱くなった。
プールの端から端へ、かの女の体を支えてぼくは進んだ。
顔に水がかかると、いっしゅん息をつめ、それから何かおいしいものでも食べたように、ぷああんと満足気に息を吐いた。
二十五メートル進んで、かの女はプールサイドに手をかける。かの女は振り向いて笑った。ほんとうに美しい笑顔が、ぼくの顔を見上げている。
信じられないことだった。

麻理ちゃんが笑った。麻理ちゃんが笑っている。
ぼくの胸に熱いものがこみあげる。
そのとき、あることに気がついて、ぼくはぎょっとする。
ぼくには今、かの女の笑顔が笑顔として見えている。しかし、かの女と何のつながりもない人は、かの女の笑顔が笑顔に見えないのだ。かつてのぼくがそうであったように―。」

「かの女と何のつながりもない人は、かの女の笑顔が笑顔に見えないのだ。」考えさせられる言葉ではないでしょうか。

Ｙ君と私は「何のつながりもない」。だから私にはＹ君は、コミュニケーションの芽がないと思えるのかもしれないのです。しかし、彼をお世話している保育士は違います。彼女はＹ君と「つながりがある」。いや、つながりをもとうと目をこらしながらＹ君をじっと見ている。だから彼女にはＹ君のさまざまな表情や彼の意思が見えるのではないかと思うのです。

ペトロたちは、この人をまず「じっと見た」のです。これがこの人との出会いを出会いたらしめました。「じっと見る」そのときに、人は人と出会うことができる。逆に言うと「じっと見る」ことなしに、人は人と出会うことはできない。出会いは、つながりをもとうとして相手を「じっと見る」ことから始まるのではないでしょうか。

「彼をじっと見て」

私の保育園が所属する日本キリスト教保育所同盟（以下、キ保同）では、東日本大震災後すぐに支援を始めました。キ保同は加盟園が２４０カ園ほどの小さな組織ですので、なしうることも限られていますが、今回は集まったお金をＹＭＣＡなどの他の組織に送金し用いていただくのではなくて、キ保同として独自の支援をなしていくことに用いることにしました。ささやかでもキ保同らしい長く継続した支援をなしていきたいと思ったのです。

保育園の組織ですから、子どもに特化した支援を被災地・被災園の声を聞きながら必要な支援をするという方針を立てました。そして、まず事務局のものが支援物資を持って被災園を訪問しました。なにはともあれ、まず現地に行くということが大事だと思ったのです。その後、何度か被災地を訪れ、必要な支援をしてきました。

一緒に支援活動を続けている仲間の園長は、南相馬市にある保育園の子どもたちに「落ち葉」を送ることを続けています。この保育園は、大変豊かな自然に囲まれた保育園ですが、原発から24・５キロのところに位置しており、放射能の数値が高く、震災後子どもたちは園庭での外遊びも極端に制限され、近くの林などには到底遊びに行けなくなりました。震災前までは、秋になるとどんぐり拾いなど自然の中で伸び伸びと遊んでいた子どもたちが、今は保育室やホールで一日中遊んでいる。そういう子どもたちの姿を見て、彼が考えた支援が

「落ち葉」を送ることだったのです。ちょうど保育園の横に神社があって、落ち葉はたくさんありました。自然の中で遊べないのならせめて、落ち葉の感触と匂いだけでも楽しんでもらおうと、子どもたちと一緒に落ち葉を集め、最初は保育士と共に車で運び込んだのです。ホールに落ち葉をおもいっきり広げ、楽しそうに遊んでいる子どもたちの姿を映したビデオを見せてもらいました。大変よい働きだと思いました。

昔、ある人が保育について語られた言葉が印象に残っています。その人は「見る」ということが大事だと言われました。保育者は子どもを「見る」。子どもを「見る」と、「自分が見える」。「自分が見える」と「保育が見える」。良い保育をするためには、まず子どもを「見る」ということが大事だと言うのです。示唆に富む言葉だと思います。そして、このことは他者と共に生きようとするときにも妥当することではないでしょうか。

仲間の園長は、つながりをもとうとして、現地の声に耳をこらし、子どもたちの姿をじっと見て、自分のなしうることを考え実施したのです。それが「落ち葉」を子どもたちに送るという支援だったのです。

「隣人を自分のように愛する」。容易いことではありません。しかし、つながりをもとうして「じっと見る」。そのときに、自分が見え、相手が見えるのではないでしょうか。そして相手が見えると、自分がなしえることも見えてくるのではないかと思うのです。今日は「彼をじっと見て」、この一句を心に留めたいと思うのです。

2013年6月5日　京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録